

1) ゼロ歳で神経学的異常所見を呈した 低出生体重児の検討

甘楽 重信* 落合 幸勝** 熊谷 公明**

目 的

いわゆる中枢性障害と診断された低出生体重児についてその長期予後を調査し、さらにその脳障害の発生因子を検討する。

対象および方法：

ゼロ歳に神経学的異常を呈し、いわゆる中枢性障害と診断された低出生体重児154人を3年以上経過追跡し、検討した。なお調査は対象をA群早期産児91人とB群正期産不当計量児(IUGR児)63人の2群に分けて検討した(表1)。

結 果

神経学的予後は表2に示すとおりである。境界児59人(38.3%)、重複障害児52人(33.8%)、単独障害児33人(21.4%)、正常児10人(6.5%)であった。脳障害の内容からみると、重複障害を含めて精神遅滞71人(46.0%)、脳性麻痺57人

(37.0%)、てんかん37人(25.3%)であった。運動能力についてみると(表3)独歩可能児103人(74.6%)、なんらかの方法で移動可能児16人(11.6%)、寝たきりで移動不能児19人(13.8%)であった。

知的能力についてみると、正常82人(53.3%)、軽度障害23人(14.9%)、中等度一重度障害49人(31.8%)であった。

障害発生因子(表4)についてみると、A群では仮死、新生児痙攣、中枢性病変等の集積が予後に影響し、B群では胎内発育遅滞そのものが重大な因子で、出生時に小頭であること、先天性奇形、仮死等が加わったものが予後不良であった。

脳の形態的発達と予後との関連をみると、A群では正常児と軽度障害児では生後1年以内に頭囲のcatch-upが認められ、CT上も脳容量の増大がみられた。しかし、重複障害児では

表1 対象児

	A群 Preterm児	B群 Term IUGR児	計
対 象 人 員	91 名	63 名	154 名
平均在胎週	32.8 ± 3.0 週	38.5 ± 1.4 週	35.1 ± 3.7 週
平均体重	1810 ± 436 g	2071 ± 346 g	1922 g

*都立北療育医療センター **都立北療育園小児科 ***神奈川県総合リハビリテーションセンター小児科

表2 最終診断

	A群 Preterm児		B群 Term IUGR 児		計	
	人	%	人	%	人	%
正 常 児	4	4.4	6	9.5	10	6.5
境 界 児	40	44.0	19	30.1	59	38.3
CP	8	8.8	1	1.6	9	5.8
MR	7	7.7	13	20.6	20	13.0
Epi	3	3.3	1	1.6	4	2.6
CP+MR	8	8.8	9	14.3	17	11.0
CP+Epi	1	1.1	0	0	1	0.7
MR+Epi	1	1.1	3	4.8	4	2.6
CP+MR+Epi	19	20.8	11	17.5	30	19.5
計	91	100	63	100	154	100

(注) CP : Cerebral palsy, MR : Mental Retardation, Epi : Epilepsy

表3 対象児一長期予後

(単位：人)

	独歩児	中間児	寝たきり児	計
正 常 児	10	0	0	10
境 界 児	59	0	0	59
CP	8	1	0	9
MR	20	0	0	20
Epi	4	0	0	4
CP+MR	7	2	9	18
CP+Epi	1	0	0	1
MR+Epi	2	1	1	4
CP+MR+Epi	4	12	13	29
計	115	16	23	154

表 4 障害発生に関する偏相関および重相関係数

	運動障害	知的障害	Epilepsy
偏 相 関 係 数			
IUGR および出生時小頭症	0.302	0.201	0.228
先 天 奇 形	0.126	0.260	—
異 常 分 娩	—	0.203	—
仮 死	0.157	0.234	—
黄 疸	0.232	0.178	—
重症感染症	—	0.173	0.235
新生児痙攣	—	0.236	—
中枢性痙攣	0.309	0.165	—
栄養障害	0.203	—	—
早 産	0.226	—	—
重 相 関 係 数	0.556	0.560	0.584
Fo (自由度)	6.944	7.100	4.591

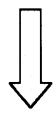
catch-upは認められなかった。B群ではcatch-upが遅れ、生後小頭であったものは、正常あるいは境界児となったものでも生後5歳において標準児群より優位に小さかった。

頭囲以外の身体発育をみると、A群で正常あるいは境界児となったものでは1歳頃に正常下限界に追い付く。A群の脳損傷児では独歩不能なものが、1～3歳で正常範囲から逸脱し、発育障害が明らかとなる。B群正常あるいは境界児では3～5歳で正常下限界内に追い付く。B群の脳損傷児では生下時より正常範囲を下回り、catch-upは認められなかった。

結 論

ゼロ歳で神経学的異常所見を呈した低出生体重児154人について長期予後を調査し、次のような結果を得た。

- (1) 神経学的予後は、境界児59人(38.3%)、重複障害児52人(33.8%)、単独障害児33人(21.4%)、正常児10人(6.5%)であった。
- (2) 運動発達についてみると、独歩可能児103人(74.6%)、なんらかの方法で移動可能児16人(11.6%)、寝たきりで移動不能児19人(13.8%)であった。
- (3) 障害発生因子についてみると、A群Preterm児では仮死、新生児痙攣、中枢性病変などの集積が予後に影響し、B群Term IUGR児では出生時小頭、先天奇形、仮死等をもつものが予後不良であった。
- (4) 脳の形態的発達と予後との関連をみると、正常あるいは軽度障害児では頭囲のcatch-upとCT上脳容量の増大がみられ、A群では1年以内に、B群ではそれよりもおくられてみられた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



目的 いわゆる中枢性障害と診断された低出生体重児についてその長期予後を調査し,さらにその脳障害の発生因子を検討する。